
特集 「ジェンダー」・論文

韓国における女性嫌悪と情動の政治

Misogyny and the Politics of Affect in South Korea

キーワード：

女性嫌悪, 情動, フェミニズム, メガリア, LGBT

keyword：

misogyny, affect, feminism, Megalia, LGBT

聖公会大学 趙 慶 喜
Sungkonghoe University CHO Kyunghee

要 約

本稿はここ数年韓国で熾烈な論争を引き起こしている女性嫌悪言説を追跡したものである。「嫌悪(혐오)」という語には、憎悪(hate)と嫌悪(disgust),そして恐怖(phobia)が混在している。嫌悪は新自由主義時代のグローバルな現象であると同時に、韓国社会を強力に規定してきた分断イデオロギーや敵対性の記憶によって増幅される情動である。本稿では、2015年以後に起きたいくつかの出来事を通して、「女嫌」という情動の増幅と転換の過程を考察した。

江南駅女性殺害事件とともに触発された韓国の「女嫌」論争は、メガリアンという新たなフェミニスト集団を誕生させた。メガリアンは女性嫌悪に反対するという消極的な立場にとどまらず、「女嫌嫌」を目指すミラーリング戦略をとった。ミラーリングは単に原本のコピーに止まらず、原本がいかにか差別と嫌悪にまみれたものであるのかを反射を通して知らしめる戦略であった。彼女たちは、男性たちの女性への快楽的な嫌悪表現や日常的なポルノグラフィをそっくりそのまま転覆することで男女の規範を攪乱した。メガリアが爆発的な波及力を持ちえたのは、女性たちの共感と解放感という同時代的な情動が共振した結果であった。

しかし、女嫌をめぐる葛藤は単なる男女の利害関係をこえたより複雑な分断にさらされた。とりわけLGBTへの反応は、右派/左派あるいは世代や宗教のあいだの様々な対立構図を生み出した。たとえばキリスト教保守陣営による「従北ゲイ」という言葉は、反共と反同性愛を結合させることで韓国社会の内なる敵への憎悪と嫌悪を凝縮させ、フェミニストやLGBTなど既存の境界を攪乱する存在に対する過剰な情動の政治を作動させた。本稿は「女嫌」言説の増幅過程を通して、それが韓国社会に蓄積された様々なイデオロギー的葛藤のひとつの兆候であることを明らかにした。

Abstract

This article traced the discourse of misogyny that has caused intense controversy in South Korea recent years. Hatred, which is global phenomena in neoliberal era is also the affect that were amplified by the memory of hostility of cold war being strongly specified south Korean society. In this paper, we examined the process of amplification and conversion of misogyny in south Korea, through the several events that occurred after 2015.

The controversy of South Korean's misogyny which inspired by the case of Gangnam station women killing, created a new feminist group called Megarian. Megarian adopted a mirroring strategy, which is not just a copy of the original hatred but a critical reflection how exactly the original was covered by discrimination and disgust. They subverted gender norms by overthrowing a hate speech and daily pornography by men. Megarian had an explosive ripple effect, as a result of resonance of contemporary empathy and feeling of liberation among women.

However, the anti-misogyny movement was exposed to more complex divisions than just conflict of male and female. Especially the response to the LGBT produced a variety of confrontations between the right and left, generation, and religion. For example, the word "pro-north gay" named by the Christian conservative group has condensed hatred and disgust with the inner enemies of Korean society by combining anti-communism and anti-homosexuality. This paper revealed that the hatred to feminism and LGBT is a sign of various ideological conflicts accumulated in south Korean society.

1 はじめに

ここ数年のあいだ、韓国社会をとりまくキーワードは「嫌悪」であるといっても過言ではない。日本でヘイト・スピーチとして呼ばれる現象は、韓国では「嫌悪表現」や「嫌悪発言」という言葉で表されている。この韓国語での「嫌悪 (혐오)」という語には、憎悪 (hate) と嫌悪 (disgust), そして恐怖 (phobia) が混在している。マーサ・ヌスbaumは、嫌悪 (disgust) が身体の排泄物、腐敗物、汚染物などの一次対象への感情を超えて社会的に拡張していくと述べる。そこで挙げられているのは、ユダヤ人、女性、下層民、同性愛者、共産主義者などである。また、嫌悪が身体の境界で生じるのは、それが同化不可能な他者性に対する拒否反応としてあらわれるためであり、こうした嫌悪がいかに社会的な位階秩序を持続させてきたのかを述べている (Nussbaum 2010)。

「嫌悪」そのものは原初的な感情であるとしても、それは特定の歴史的な文脈のなかで特定の集団に拡張され、位階化され、憎悪として正当化される。今日のヘイト・スピーチが単発的な行為ではなく、歴史的に蓄積されてきた言語的慣習に依存し、それを引用・反復する行為であるとするならば (Butler 1997=2004: 81), その主なターゲットや表出の強度が各社会によって異なるのは当然のことである。たとえば日本ではヘイト・スピーチが主に「嫌韓」や「在日特権」などコリアンに対して表面化したのに対し、韓国における「嫌悪」は主にフェミニズムへの反感や男女の対立として表面化した。つまり嫌悪・憎悪現象は、日本では植民地主義やレイシズムの問題に特化したのに対し、韓国ではジェンダー・セクシュアリティ問題として噴出したと、ひとまずいうことができる (もちろんこのことは日本における女性嫌悪や韓国における移民嫌悪の不在を意味するわけではない)。

「女性嫌悪」あるいは「女嫌 (요혐)」⁽¹⁾と

いう言葉は、今や韓国社会の時代的な気分や情動を考えるうえで欠かせない言葉となった。本稿は、ここ数年韓国で熾烈な論争を引き起こしている「女嫌」言説の増幅過程を韓国社会の特殊な文脈とともに考察する。まず第2節では、先行研究を参照しつつ韓国における女性嫌悪の社会的文脈を整理する。

2 情動 (affect) としての女性嫌悪

この間韓国では女性嫌悪について様々な研究成果が提出された。ネット右派によるコミュニティサイト「イルベ」⁽²⁾の女性嫌悪言説については、いわゆる87年体制以後の政治文化とネット文化、世代格差による不安定性、という複合的な条件の産物として位置付ける見方が説得的である (박가분, 2013, 2014; 손희정, 2015)。87年体制とは、1987年6月抗争の末に導入された5年任期の大統領直接選挙制をもとにした憲政体制であるが、より広義には政治的民主化と経済的自由化の同時追求による政治の失敗、あるいは制度的民主主義の限界という意味合いを含んだ言葉である。87年体制は、韓国社会に驚くべき民主化の歩みをもたらしたが、他方で社会変革の動力を合法的な現実政治の領域に馴化させた。この体制において、これまでその外部に置かれた女性、性的少数者、外国人労働者、障害者などのマイノリティは、市民権獲得闘争を経て体制の内にひとまず「承認」されるに至った。孫ヒジョンは、このように民主化と自由化を押しすすめた87年体制が、97年のIMF危機を経て「外部なき世界」を達成したと述べる。安全網の不在のなかで破片化した個人が無限の生存競争に投げ出されるという事態は、これまで政治的・経済的主体としての資格を独占していた男性に相対的な剥奪感をもたらした (손희정 2015)。彼らによる民主化勢力やマイノリティ集団への憎悪と嫌悪、復古的秩序への回帰の欲望は、アイデンティティや差異の承認政治がもたらした

不可避の負の帰結として位置付けられる。

権明娥は、バトラーを参照しつつ、嫌悪が単に表現とその遂行という次元だけではなく、「攻撃対象の集団を特定のアイデンティティの形象として構成する美学の政治化」過程であると強調する。つまり嫌悪を行う側は、対象を特定の形象に閉じ込めるといふ美学的な生産過程を通して憎悪を快楽に変え、嫌悪の対象となった側は、その形象に抵抗するために自らのアイデンティティを絶えず証明せねばならないというジレンマに逢着する(권명아 2017: 17)。こうした快楽としての嫌悪は、平等に嫌悪する権利、あるいは「相互非尊重を通じた相互承認」(박가분 2013: 129)ともいべきイルベの政治的美学と共鳴している。こうした関係性において、マイノリティの権利や政治的正しさの主張は、嫌悪の平等性という美学に反するだけでなく、フリーライダーであるとしてさらに嫌悪を増幅させることになる。

イルベの登場とその影響力は、韓国のネット市民が民主化勢力を基盤とした左派ナショナリズムに親和的であるというこれまでの通念を覆す出来事であった。イルベはこれまで光州抗争や故・盧武鉉前大統領など民主化運動の象徴を歪曲したり、北朝鮮、移住民、女性や性的少数者、セウォール号遺族への侮辱や嫌悪の言説を執拗に再生産してきた。さらに、在特会と同じように「行動する右派」⁽³⁾となったイルベに対して、韓国社会は戸惑いと危機感を覚え始めた。たとえば2014年、イルベの会員たちはセウォール号遺族による断食闘争の現場である光化門広場でチキンとピザを大量に食べる「暴食闘争」をおこなった。韓国で若い世代の政治的記憶を形成する重要な契機がろうそくデモに象徴される「街頭の政治」であったとするならば、イルベによるその盗用 (appropriation)、そしてネット空間を超えた広場の侵犯は、韓国の市民社会に脅威をもたらした。

このような嫌悪の波及力を考えるうえで、本稿では情動 (affect) という言葉を用いている。今

日のグローバルな現象としての嫌悪は、個々の主体に内在する感情というよりは、人々の集合的な身体経験のなかで蓄積されてきた情動と考えるほうがふさわしい。情動研究は韓国で多くの学術的進展が見られるが(권명아 2017; 신현준 2016)、本稿では情動を身体のあいだの相互作用、つまり論理や理性に先立つ直接的で自律的な身体的感応をあらわす語として用いる。たとえば感情 (emotion) や情緒 (sentiment) が情動の捕獲 (capture) であり、主体に属した認知可能なものであるとするならば、情動は認知を超えた間主體的な潜在性の次元に漂うものである。その意味で、情動とはこれまで学術の対象として適切に把握できなかった気分・空気・雰囲気などを含んだ概念であり、また人々の「ふれあい」(酒井 2010) という物理的過程を通じて喚起される喜び、悲しみ、痛み、怒りなど社会的経験でもある。

イルベに限らず、今日の韓国でしばしば遭遇する「アカ」や「従北」といった嫌悪表現や、湖南⁽⁴⁾出身者、女性、移民に対する嫌悪は、歴史的に蓄積されてきた反共主義、地域主義、家父長主義、国家主義による言語的偏重に基づいている。つまり嫌悪の情動は、新自由主義時代に入り急に登場したのではなく、韓国社会を強力に規定してきた分断イデオロギーや敵対性の記憶によって増幅されるものである。この意味でイデオロギーと情動は対立するというよりは相互補完の関係にあるといえよう。むしろ「情動の過剰を作動させる原理のなかにはいかにイデオロギーの呼びかけが介入しているのか」(이동연 2016: 29) を考えてみる必要がある。

本稿で考えたいことは、イルベなどの一部の極右集団による嫌悪現象の「特殊さ」ではなく、むしろイルベ的美学が一般市民社会に浸透しつつある状況である。いいかえれば、「嫌悪」がなぜ広範囲な時代の情動となったのか、そしてなぜそれが「女性嫌悪」という現象に特化したのか、という問題である。以下では、2015年を画期として

女性嫌悪がどのように増幅していったのかを具体的な出来事を通して追跡する。さらに、最近浮上したいくつかの争点を通して、「女嫌」問題が男女間の利害関係を越えた韓国社会に蓄積された様々なイデオロギ的葛藤のひとつの兆候であることを明らかにしようとする。

3 女性による「女嫌」の(再)発見

韓国で女性嫌悪が大きな争点として浮上しはじめたのは2015年頃であるといわれている。それ以前から身勝手に贅沢好きな女性を「キムチ女」と揶揄することは日常的に起きていたし、芸能人による女性蔑視発言もたびたび問題となっていたが、2015年はまさに「女性嫌悪」元年とでもいうべきほどの様々な出来事が起きた。まずはこれらの流れを大まかに振り返っておかねばならない。2015年初頭、ツイッターに「今は男が差別される時代だ。私はフェミニズムが嫌だ」と書き残した10代の少年がISに志願した。この事態に対し、著名な男性コラムニストである金テフンは、現代のフェミニズムが公正さではなく集团的利益のみを追求するモンスターを生み出しているとして、「ISよりも無脳的フェミニズムがもっと危険だ」と書いた⁽⁵⁾。もちろんこのコラムは多くの非難に晒されたが、少年に忌まわしい選択をさせたという点でフェミニズムがひとつの社会的な脅威として認識される端緒となった。

2015年8月には男性誌『MAXIM KOREA』が、性犯罪を連想させる写真を表紙に載せ物議をかもした。テープで両足首を縛られた女性の足だけが車のトランクから見える写真の横には、THE REAL BAD GUYという文字とともに、「悪い男が好きだって？ 本当の悪い男とはまさにこういうやつだ。たまらないだろう？」といった陳腐極まりない内容を書いた。また、若い世代の不安定な状況をユーモラスに歌う若手バンドも、女性嫌悪論争の標的となった。「平凡で情けない男」の



写真1 問題となった「MAXIM KOREA」の表紙

日常を嘆く歌詞に、女性を揶揄する内容や、さらに隠し取りされたアダルトビデオに関する内容があったためである。彼らが左派政党である正義党の応援ソングを担当していたことから、貧困や労働問題に取り組む正義党のジェンダー観も批判的となった⁽⁶⁾。それ以外にもメディアを通じて再生産された妄想と錯覚に満ちた女性嫌悪のファンタジーは、女性たちによって再発見され、告発の対象となっていった⁽⁷⁾。

こうしたなかで女性嫌悪が公論化する決定的な出来事となったのは、2016年5月17日に江南で起きた殺人事件であった。20代前半の女性が江南駅付近の公衆トイレで見知らぬ男性によって無残に殺された。統合失調症を抱えていた犯人は、犯行の動機について「日頃から女性に見下されていた」と語った。5名のプロファイラーによる心理分析をふまえて警察はこの事件を「妄想的態度、表面的な犯行動機の不在、被害者との関係から直接的な触発要因のない典型的な通り魔犯罪であり、そのなかでも精神疾患と統合失調症の類型に該当するもの」と発表した。これに対して女性た

ちは、1時間半のあいだ出入りした6名の男性ではなく、女性がトイレに入るのを待ち構えての犯行であったことを挙げ、女性に対する嫌悪犯罪(hate crime)であると主張した。さらに、現場が人通りがもっとも多い江南駅であったこともあり、SNSに「#たまたま生き残った」というハッシュタグを付け、江南駅10番出口付近に哀悼場所を設け、カラフルな付箋に思い思いのメッセージを書き残した。

「あなたは運が悪く、私は運が良かっただけというこの現実に憤怒する」「死の理由などない。ただ殺せるから殺したのでしょうか。それが私になるかも」「『殺さないで。強姦しないで。セクハラしないで』というのがなぜ男性嫌悪になるのか」「男たちはここでも女に教えようとする」「男性に保護されたくありません。男性がいなくても安全でありたいだけ」など1,000件以上のメッセージが寄せられた⁽⁸⁾。

この江南駅殺人事件への反応が、「女嫌」問題を爆発的に公論化させた分岐点であったことは間違いない。というのも、この事件は自らの命の危険を肌で感じた若い女性たちによる異議申し立てだけでなく、それに対する男性たちの反発もまた引き起こしたからである。一部の、あるいは多くの男性たちは、この事件が精神分裂症を抱えたサイコパスによる殺人事件にすぎず、女性嫌悪とは無関係であることを主張した。彼らは男性たちを潜在的犯罪者であるかのごとく扱うことで、女

性たち自身が男女の対立や男性嫌悪を強化していると反発した。「男であるために死んだ天安沈没事件の勇者たちを忘れません」と書いた花環を送ったイルベのメンバーだけでなく、多くの男性たちが女性たちの「被害妄想」と「過剰反応」を語り同じように江南駅の現場に立った。こうして、精神疾患による通り魔犯罪という警察による発表、それに対する女性たちの爆発的な怒りの表面化、それに対する男性たちの反発という相互作用の過程で「女嫌」言説は次第に増幅していった。

この過程で明らかになったのは、女性嫌悪による殺人がおこなわれたという単なる客観的事実ではない。事件への怒りと恐怖、犠牲者への哀悼、社会的な共感を求める強い情動に対し、それを拒否するとともに殺人の原因を個人の精神状態に閉じ込めようとするもう一つの強い防御的な情動によって、タブー視されてきた女性嫌悪の社会的現実がいみじくも露呈されたと見るべきである。つまり女性嫌悪への過剰な否定が、逆に女性嫌悪の強力な現実を見事に証明してしまった。この事件を契機に「女嫌」という言葉は流行語となると同時に、それへの立場表明や論争に晒されるという意味でブラックワードとなった。

4 「女嫌嫌」あるいはミラーリング

同じ時期、女性たちの「女嫌」への抵抗がとてつもない強度の情動のなかで始まっていた。それは批判や告発といったこれまでのフェミニズムのあり方を塗り替える、新たなかたちで展開された。2015年から2016年にかけて「メガリア」と呼ばれる現象が韓国社会で大きな話題となった。メガリアとは、女性嫌悪に反対するフェミニストたちによるサイト「MERSギャラリー」の会員たちが、ノルウェイの小説『イガリアの娘たち』(1975)にちなんで作った新しいサイトである⁽⁹⁾。彼女たちは、自らを「メガリアン」と名乗り、男性の価値観に沿った女性像を「コルセット」と呼び、そ



写真2 江南駅10番出口の哀悼場所

こからの解放を呼びかけた。女性嫌悪に反対するという消極的な立場にとどまらず、「男嫌」ならぬ「女嫌嫌」を目指すミラーリング戦略をとった。

たとえば、2000年代以後「キムチ女」をはじめ女性に烙印を押す呼び名が数え切れないほど登場したのに対抗し、メガリアンたちは男性たちを「韓男虫」といった呼び名で嘲笑しはじめた。男性たちによる日常的なポルノグラフィも、そっくりそのまま女性たちによって転覆された。男性が胸の小さい女性を嘲笑するのと同じようにペニスの小さい男性を嘲笑したり、また男性を集団で殴る挿絵をアップして笑いを誘った。このことは単なる男性に対する女性の抵抗という二項対立に収まらない破壊力を持った。男性にのみ許されている快楽的言語がポルノグラフィックであればあるほど、女性によるその転覆性は想像以上に高まるほかない。逆にいえば、人々が驚愕し不快になればなるほど、その原本である男性自身の暴力と嫌悪の強度が証明されるのである。当初多くの人々はメガリアンが女性ではなく偽装した男性であると考えた。それは、女性が男性よりも汚い言葉で相手を罵れるはずがないと信じたからであった。この模倣の実践は、女性というアイデンティティを攪乱する画期的なプロジェクトであった。

メガリアの活動はオンライン上だけに限定したものではなかった。もっとも大きな成果に、アダルトサイト「ソラネット」の閉鎖運動があった。メガリアンたちは盗撮根絶キャンペーンを始め、1999年から17年間ものあいだ難なく運営を続け100万人の会員を有した「ソラネット」を閉鎖するための請願運動を始めた。ソラネットは盗撮、強姦、リベンジポルノ、援助交際、集団性行為などのコンテンツを載せるだけでなく、それらを謀議するための情報を交換するサイトであったが、メガリアンたちは国会議員と連携し、その違法性と被害を警察に訴え、サイトを閉鎖に持ち込んだ。こうしたことは既存の女性団体がしえなかったことであった。

メガリアのミラーリング戦略は、ユーモアやパロディとしても大衆的な波及力を持った。芸能人の仮想結婚生活を見せるJTBCのリアリティ番組では、女性芸人の金スクがミラーリングを適切に活用し、「男はおとなしく家で家事でもしてほしい」「男のくせに声が大きい」といった典型的な家父長言葉を逆転させる「家母長」キャラクターを演じた。金スクは、2015年に公開された映画〈マッドマックス (Mad Max: Fury Road)〉の女性主人公の名前にちなんで「フェリオスク」と呼ばれ、女性たちから爆発的な人気を得た。金スクは以前から理想の男性像に「おとなしく家事をする人」を挙げており、このキャラクターが必ずしもメガリアの影響のもとで作られたわけではなかった。しかしこれらが一連の現象として波及力を持ちえたのは、メガリアとフェリオスクに対する熱狂と解放感という女性たちの同時代的な情動が共振した結果であった。

メガリアに対しては、「女嫌嫌」を超えた「男嫌」言説に該当するとして、女性版イルベと見方も多く提出された。女性嫌悪については聞く耳を持たなかった男性たちが、ペニスの大きさについての評価に接したとたん、メガリアンの男性嫌悪の非道徳性を猛烈に批判しはじめた⁽¹⁰⁾。既存の進歩派男性やフェミニストのあいだでもメガリアの言説に見られる嫌悪の無限連鎖を憂慮する声は少なくなかった。目的の正当性に対して手段が不当であるという点は、多くの進歩派知識人がメガリアを残念に思う理由であった。たとえば歴史学者チョン・ウヨンはツイッターを通してメガリアを非難する書き込みを続けた。彼はメガリアを「小児病的」と評し、「彼女たちが生産流布する言説はイルベと同じく、欲望表現に対する道徳的倫理的禁制を破壊する役割を果たしている。……むしろニューライトの人間観と直結している」と批判した⁽¹¹⁾。彼らはミラーリングによる嫌悪の情動ではなく、合理的で冷静な討論によって女性たちは初めて真の抵抗の主体になりう

ると考えたのである。

しかし、ミラーリングの戦略は、単にすでに在るもののコピーに止まるわけではない。ミラーリングは原本がいかに差別と嫌悪にまみれたものであるのかを反射を通して知らしめる戦略であった。鏡は実在を対称的に反映するものではなく、映し出されるイメージを反射させることで、実在に揺さぶりをかける装置である。何よりもメガリアによるミラーリング——風刺、嘲笑、パロディ——は実際的な暴力をとまなわない、言語のパフォーマティビティによるものである(류진희, 2016: 59)。江南駅事件以後、男性たちの女性嫌悪と実際の暴力の高い相関関係が目されるのに対し、女性たちのミラーリングは現実生活のなかで男性に脅威を与えたり、実際の暴力を稼働させるのが不可能なばかりでなく、むしろメガリアンであることが判明した場合の報復に怯える可能性がより高くなる。こうした意味でもメガリアのミラーリングを、「女嫌」と対称的な「男嫌」と見なすのは一面的である。

もちろん、メガリア自体がオンライン・コミュニティである以上、あらゆる暴力的な言葉が飛び交うカオスの空間が演出されたことは間違いない。嫌悪表現がストレス解消や人々の関心を惹くために活用されたことも否定できない。ただ、女性たちにとってミラーリングの過程は、男性の視線によって対象化されてきた自らの位置と向き合う苦痛の経験でもあり、また興味深い学びの経験をとまなうものであった。メガリアンたちは「誰かを憎むのは面白かった」「メガリアで嫌悪の感情が何かを初めて理解した」「嫌悪は戯れの感情だった。男性たちが楽しみながら女性嫌悪をする理由がわかった」といった反応を見せている⁽¹²⁾。

メガリアを注意深く見守っていた多くの若いフェミニストたちは、「メガリアは男嫌ではない」あるいは「韓国で男嫌は不可能である」との見解を示した。彼女たちが問題にしたのは、女性たちがたどり着いた複雑で至難な経路を読みとること

なく、それを「男嫌」と名付けることの「思考の怠慢」であった⁽¹³⁾。つまり、メガリアが達成した地平を、女嫌／男嫌という同等な男女間対立のフレームに落とし込む思考の安易さに対して、女性たちは執拗にノーを突きつけたのである。

5 嫌悪という情動の政治

5.1 連鎖と分裂：女嫌からLGBT嫌悪へ

メガリアはその後内部分裂を経て、さらに目指す方向性によって複数のグループに分化していった。その具体的な原因となったのは、ゲイが自らの性的アイデンティティを隠して女性と結婚する事例について、一方では「ゲイも同じ韓男虫」であると批判したのに対し、他方で弱者である性的少数者を嫌悪の対象にすることに対する反論が提起されたことであった。分化したグループのうちもっとも極端な女性主義をかかげるWomadは、フェミニズムの基盤を女性に限定し、ゲイやトランスジェンダーを含んだ生物学的男性に対する露骨なヘイトスピーチを繰り返しただけでなく、殺人や暴力をほめかす書き込みをおこなった。政治的正しさよりも、生物学的セックスとしての女性の経験に執着し、嫌悪を表出する傾向は多くの人々の批判的となった。

メガリアンたちによる「女嫌嫌」という企図は、女性たちの覚醒と分裂を経てより複雑な分断にさらされた。メガリアンたちが一枚岩でないように、フェミニズムも女性たちも様々な境界や分断ともにある。当然のことながら女嫌をめぐる葛藤は、単に男女の対立に収斂されるものではない。とりわけLGBTへの反応は、右派／左派あるいは世代や宗教のあいだの様々な対立構図を生み出している。そうした構図を反映した致命的な事例のひとつが、EBS(教育放送)のバラエティ番組「気難しい男女(까칠남녀, 以下「男女」)」をめぐる葛藤であった。女嫌というある意味でシンプルな嫌悪を超えた、より歴史的で実存的な同性愛嫌悪が

前面にあらわれてきたのである。

2017年3月に始まった「男女」は、その企画意図を「近年大きな衝撃をもたらした女性嫌悪による犯罪をきっかけに、韓国社会に存在する性差別と性役割に対する誤解と偏見を克服しようとする」と説明した。この意図の通り「男女」は、ジェンダーやセクシュアリティに関する多様な論点にそってトークを展開する挑戦的で実験的な番組として注目を浴びた。結婚と離婚、セックス、避妊、墮胎、性暴力、セクシュアル・ハラスメント、自慰、性の商品化、また女性の体毛や10代女性の性的自己決定権などに至るまで多様なテーマが提示された。開始当初は、堅苦しい教育放送のイメージを変えたとの賛辞とともに、タブーを破り性を語ることの教育的効果について肯定的意見が目立ったが⁽¹⁴⁾、回を重ねるごとに女性の立場だけを代弁しているとして公平性に疑問が投げかけられた。

その後、「女性の立場に偏った」という番組の評価は、より根源的な韓国社会の難関に突き当たった。決定打となったのが、2017年に12月25日と2018年1月1日に放送された「性少数者特集」であった。この特集は、これまでのトークショー形式ではなく教室コント形式で、転校生である4人のLGBTに対して在學生たちが様々な質問を投げかけるかたちで展開された。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの当事者たちは、それぞれLGBTとして各地で活躍する人々であり、カミングアウトのきっかけやこれまでの苦い経験について、興味深くも真剣なトークを展開した。二回に分けての放送であったことから、制作サイドにとってもこの特集がきわめて重要な話題作となることを予想したと思われる。

しかし「男女」の視聴者掲示板には、番組放送前から1,000件以上の放送反対の声が飛び交った。特集を「決死反対」する主な理由は、同性愛美化、エイズの害悪、青少年の性的アイデンティティの混乱・墮落などであり、これらは基本的に



写真3 「気難しい男女」性少数者特集の一場面

は性的少数者の「性倒錯」を治療の対象として考えるプロテスタント保守陣営の立場を反映していた。番組終了後、反同性愛キリスト教市民連帯、全国学父母教育市民団体連合などのキリスト教団体および保守系教育団体は、声明を発表するとともに、番組制作担当者の個人情報を入力して執拗に抗議の電話とメッセージを送った。その後、前述団体のほか公教育学父母連合、次世代建て直し学父母連合など計17団体がEBS社屋の前で連日「淫乱放送廃止」を掲げて抗議デモをおこない、ロビーを占拠する事態まで起きた⁽¹⁵⁾。

「男女」の制作サイドや出演者のなかでも、特に保守団体のターゲットとなったのが、セックスコラムニストのウン・ハソンであった。彼女は先の「性少数者特集」に出演したLGBT当事者のうち唯一のレギュラー出演者であり、番組を象徴する人物であった。保守団体は彼女がセックスに関するコラムを書き、セックストイを販売していることから、「淫乱器具を売るバイセクシャル」であるとして彼女を降板させるよう働きかけた。EBS関係者は2018年1月8日に抗議団体との面談をおこない、その後出演者との話し合いを重ねたものの、結局ウン・ハソンを降板させるという決定を下した。出演者および制作関係者たちが彼女の降板に断固反対したのに対して、番組CPの独断で決定を下したことも明らかになった⁽¹⁶⁾。出演者たちがウン・ハソンの降板に抗議し番組の録画をボイコットした結果、「男女」は最後二回

分の放送を残してあっさりと早期終了することとなった。EBSおよび「男女」制作責任者の自己否定ともいべき事態は、結局すべての人々を敵に回すことで終わりを迎えた。2018年2月初めの出来事である。

5.2 反共と反同性愛の不穏な結合

先に述べたように「男女」は開始当初から性についてのタブーを破る話題を積極的に取り上げてきたが、保守陣営にこれほどの拒否反応を惹き起こしたのは、(きわめて教育的効果の高いと思われた)性少数者特集が初めてであった。それはLGBTが韓国近現代の支配権力であるプロテスタント系保守陣営の存立と価値体系を揺るがす問題であったからである。近現代史の過程で彼らの攻撃対象が常に「アカ(パルゲンイ)」であったとすれば、新自由主義時代に目をつけた新たなターゲットはLGBTであった。LGBTという用語が普及する前から、保守キリスト教団体は、同性愛ヘイトデモを積極的に展開したり現実政治に介入してきた。たとえば国会では2007年から3度にわたって同性愛者差別の項目を含んだ差別禁止法の法案が提出されたが、いずれも彼らの猛烈な反対によって実現されなかった。

韓国の制度政治は常にこのキリスト教保守陣営との駆け引きの政治でもあった。進歩派団体の第三世代キリスト教研究所の金ジノは、朴槿恵政権時代に拡散した草の根的な極右組織が今後ますます政治力を持つ可能性に言及しつつも、その後の朴政権没落による韓国の極右勢力の瓦解や信者たちの非同調などによって、プロテスタント保守陣営が一層反同性愛に固執していると指摘する⁽¹⁷⁾。2017年大統領選前のTV討論で、保守候補の洪準杓による同性愛についての質問に対し、現大統領の文在寅が「反対します。嫌いです」といった稚拙な応答をしたことは記憶に新しい。また最近も女性家族府が発表した「第二次両性平等基本計画」で、男女平等だけでなく性的少数者も含めた性平

等(gender equality)という言葉を用いたことについて、わざわざ長官が韓国キリスト教連合を訪問し釈明したことが報じられた。キリスト教保守勢力の顔色を伺うのは、進歩派の現政権も例外ではない。

今日の教会権力は同性愛嫌悪について互いに競争的ですからある。同性愛嫌悪の情動は、「反共」がそうであるように、プロテスタント系保守陣営の正統性を担保するうえで重要な資源であり、これらの教会が存続するかぎり増幅されうるものである。彼らの情動をもっともよくあらわしているのが「従北ゲイ」という言葉である。「アカ」と「同性愛者」という彼らの二大ターゲットを安易に結合させたこの言葉は、LGBTを家庭や社会を汚染させるとともに国家安保を脅かす存在として形象化したものである。「従北ゲイ」という言葉が初めて登場したのは、先に述べた2013年の差別禁止法に対するキリスト教保守勢力の反対運動のなかであった。彼らは性別、肌の色、障害、宗教、思想を理由にしたすべての差別を禁止するという差別禁止法を、「主体思想賛美」「従北ゲイ法」といった反共主義のフレームで言説化し、反対運動を展開した。「正しい性文化のための国民連合」のホームページで公開している動画資料「差別禁止法の隠された真実」は、その内容が次のように述べられている。「大韓民国の国民たちよ、騙しに流されてはならない。差別禁止法にある巧妙な手口を見よ。結局大韓民国を引き渡そうとする手口である。…北韓が核で挑発している今、私たちが差別禁止法を防がなければ国家保安法が無力化し、従北勢力によって結局ベトナムのように滅亡するだろう。青少年たちは同性愛に蝕まれ自殺するであろう。逆差別によって、社会的共感を持つ大多数の国民たちが犯罪者となるだろう。」⁽¹⁸⁾

「従北ゲイ」という短い言葉は、韓国社会における内なる敵への憎悪と嫌悪を凝縮させたものである。反共と反同性愛という不穏で不自然な結合は、過去の大韓民国に一体化し、権力の化身となっ

たキリスト教保守勢力にとって、きわめて自然かつ決定的なアジェンダであった。冷戦的アイデンティティを核とするこれらの人々は、イルベなどの脱冷戦・新自由主義時代のネット右翼とは一線を画しつつも、フェミニズムやLGBTなど既存の境界を横切り攪乱する存在に対する過剰な嫌悪と恐怖を撒き散らし、情動の政治を作動させる点でつながっている。この時「アカ」や「従北」といった冷戦的イデオロギーは情動とともに呼び起こされ、今日の新たな嫌悪対象に上書きされる。「従北ゲイ」は時には「従北フェミ」にとって代わられる。これらの現象は、今日の政治と情動の関係を新たに考えさせるものである。嫌悪の情動が「戦略的に」政治に利用されるというよりは、情動が政治そのものであり、政治が情動そのものになりつつあるのではないか。韓国における女性嫌悪の増幅過程は、このような「政治の情動化」あるいは「情動の政治化」と呼ぶべき現象をまざまざとみせつけた。同時代的かつ歴史的な嫌悪を考えるうえで、無意識のうちに凝固されたイデオロギーと情動が共鳴する政治過程に着目することがますます重要となるだろう。

6 おわりにかえて

江南駅女性殺害事件とともに触発された韓国社会の女性嫌悪論争は、メガリアの登場とそれへの女性たちの爆発的な共感とともに大きな波を形成した。これまでの男性たちの快楽的な嫌悪が強力だったからこそ、メガリアンによるミラーリングは想像以上の転覆性を持ち得た。しかし、嫌悪の連鎖反応は、女嫌論争をより根底的な韓国の支配秩序を揺るがす方向へと転換させた。キリスト教保守陣営によるLGBT嫌悪は、自らのアイデンティティの要である反共イデオロギーと結合することで過剰な情動を稼働させている。本稿では現在進行形の出来事を中心に、この女性嫌悪の増幅と転換の過程を追跡した。

本稿で扱うことができなかったが、2018年に入り「女嫌」に対する女性たちの抵抗は、さらに爆発的な#MeToo運動へと発展していった。女性検事による男性上司へのセクハラ告発から始まった韓国の#MeTooは、その後またたく間に政治・芸術・芸能・学問・教育といったあらゆる分野へ拡がり、韓国社会に蓄積されてきた醜悪なまでの性暴力と女性嫌悪の実態を明るみにした。今日その火種は、隠しカメラやリベンジポルノといった、より広範囲で日常的な性被害の告発へとつながりつつある。他方で、韓国では女性・LGBT嫌悪に対するラディカルな批判意識が、多文化・移住民嫌悪など人種主義の問題には積極的につながらない現実もある。ここには、韓国の多文化政策が未完の脱植民地化および民主化をすすめる進歩運動や政党ではなく、保守政権下での家族再生産政策として占有されてきたという事情がある(趙, 2018)。保守政権および政党による国家主義的な多文化アジェンダから脱却し、あらためてフェミニズムと脱植民地主義、LGBTと難民問題などの積極的な横断が求められている。今後さらに掘り下げるべき課題である。

注

- (1) 「女性嫌悪」「女嫌」はミソジニーと同義であるが、韓国での文脈をふまえてこの言葉をあえて用いることとする。
- (2) 「イルベ」(「日刊ベストストア」の略称)は、2010年にDCインサイドというコミュニティから派生して生まれた(DCインサイドは日本の2ちゃんねるに該当する)。イルベは当初はユーモアサイトであったが、徐々に右派によるフェイクニュースの発信地および交流の場として批判の的となった。2ちゃんねるとイルベを比較分析したすぐれた研究に金善映(2017)がある。
- (3) 安田浩一によるインタビュー参照。『京郷新聞』2014. 9. 19.

- http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?artid=201409192113365&code=970203
(最終閲覧日 2018年7月25日)
- (4) 南部の全羅道地域を指す。古くからの慶尚道との地域対立に加え、1980年光州抗争を侮辱する嫌悪表現にもこの地域性が動員される。
- (5) 『OhmyNews』 2015. 2. 13.
http://www.ohmynews.com/NWS_Web/View/at_pg.aspx?CNTN_CD=A0002081840
(最終閲覧日2018年7月25日)
- (6) 『女性新聞』 2016. 3. 31.
<http://www.womennews.co.kr/news/92592>
(最終閲覧日2018年7月25日)
作詞作曲を担当するジュンシギは、「女性の苦痛についてはよく知らなかった」ことを認め、SNSに反省の文章を載せた。
- (7) たとえばウェブ漫画『サンナムジャ (男の中の男)』は、彼女を殴った後に照れくさいセリフを言い放つというナンセンスな四コマ漫画で当初人気を集めたが、その後「女嫌」作品であるという批判が相次いだ。作家は「これを見て実際に女性を殴ろうとする人がいるとすれば、彼が狂っているだけ」と反論したが、結果的に漫画を削除するにいたった。
- (8) 『京郷新聞』 2016. 5. 23.
http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?artid=201605231716001
(最終閲覧日2018年7月25日)
- (9) 2015年5月以後、MERS(韓国ではメルスと呼ぶ)によって計186名の患者が発生し、そのうち37名が死亡した。当初「MERSギャラリー」は純粹にMERSに関する情報交換サイトであったが、ふとしたことがきっかけで熱狂的な男女間の対立の場に変容した。性的アイデンティティやセクシュアリティの固定観念を覆すような女性たちによる爆発的な書き込みに対して、DCインサイドの管理人は今までおこなったことのない監視と弾圧を始めた。自らをメガリアン名乗る女性たちが、元サイトから分離し、新たなサイトで活動を始めた。
- (10) 『京郷新聞』 2017. 07. 08. 参照。
http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?code=940100&artid=201607082147005&sat_menu=A070
(最終閲覧日2018年7月25日)
- (11) 『国民日報』 2016. 8. 26.
<http://news.kmib.co.kr/article/view.asp?arcid=0010884881&code=611211111&cp=nv>
(最終閲覧日2018年7月25日)
また、2016年以後のいわゆる「ろうそく革命」において重要な役割を果たしたJTBCニュースルームでも、メガリアを女性イルベと評してその男性嫌悪の傾向を指摘した。
- (12) 『京郷新聞』 2017. 07. 12.
http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?artid=201607121834001&code=940100
- (13) 손희정 「'개독'은 혐오표현일까?」 『京郷新聞』 2016. 02. 16.
http://news.khan.co.kr/kh_news/khan_art_view.html?artid=201602162054415&code=990100
(最終閲覧日2018年7月25日)
- (14) たとえば、「三視世評」 『朝鮮日報』 2017. 4. 27.
http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2017/04/27/2017042700026.html
- (15) 『連合ニュース』 2018. 01. 05.
- (16) 彼女によれば、最終的な決定を下した番

組CPは最初から「男女」に参加したのではなく、ひと月前から合流した新しいスタッフであった。降板の理由としては、彼女が自身のSNSで反同性愛者たちに向けて書きたいはずら（抗議先の電話番号の代わりにクィア団体支援番号を載せた）が詐欺罪に値し、番組出演者として不適切であるということであった。ウン・ハソンのフェイスブックページ。

<https://www.facebook.com/eunhasun2/posts/1085015021637234>

(最終閲覧日2018年7月25日)

- (17) 『ハンギョレ新聞』2017. 9. 28.

<http://www.hani.co.kr/arti/society/religious/813002.html>

(最終閲覧日2018年7月25日)

- (18) <https://cfms.kr/차별금지법에-숨겨진-진실-막아야합니다-주변에-알/>

(最終閲覧日2018年8月25日)

参考文献

- Butler, Judith (1997) *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, Routledge. (= 2004, 竹村和子訳, 『触発する言葉——言語, 権力, 行為体』, 岩波書店)。
- 趙慶喜 (2018) 「裏切られた多文化主義：韓国における難民嫌悪をめぐる少考」『現代思想』8月号。
- Gregg, Melissa and Seigworth, Gregory J. ed. (2010) *Affect Theory Reader*, Durham, NC: Duke University Press.
- 金善映 (2017) 「インターネットにおけるヘイトスピーチと右傾化現象を読み解く：「2ちゃんねる」と「イルベ」掲示板のユーザーはなぜ「左」ではなく「右」を選択しているのか」『国際情報研究』14巻1号。
- Massumi, Brian (2002) *Parables for the Virtual: Movement, Affect, Sensation*, Duke University Press.
- Nussbaum, Martha C. (2004) *Hiding from Humanity, Disgust, Shame, and the Law*, Princeton University Press. (=2010 河野哲也監訳 『感情と法——現代アメリカ社会の政治的リベラリズム』慶應義塾大学出版会)。
- 酒井直樹 (2010) 「情動の政治学」『思想』1033。
- 권명아 (2016) 「신냉전 질서의 도래와 혐오 발화/ 증오정치 비교역사 연구」『歴史問題研究』35。
- 류진희 (2015) 「‘춧불 소녀’에서 ‘메갈리안’까 지, 2000년대 여성 혐오와 인종화를 둘러싸 고」『SAI』19。
- 박가분 (2014) 「일간베스트와 ‘정치혐오의 정치」」『文化科学』12。
- 서동진 (2017) 「증오, 폭력, 고발 : 반지성주의적 지성의 시대」『黄海文化』3。
- 손희정 (2017) 『페미니즘 리부트』나무연필。
- 신현준 (2016) 「아시아 도시의 대안적 공간화 실천을 위한 序説 : 정동, 공간, 정치」『SAI』21。
- 이동연 (2016) 「정동과 이데올로기」『文化科学』86